

音楽を生涯にわたって愛好する生徒を育てる音楽教育とは ～イタリアの音楽教育の現場から考える～

静岡市立清水第三中学校 教諭 前橋 奈々美

はじめに

生徒が「楽しい」と感じられるように授業を展開し、中学校卒業後も音楽を楽しんで人生を送る生徒に育てるには、どのような手立てを打てば良いのか頭を悩ませていたところ、音楽が生活の中に根付いているヨーロッパ、特にオペラ発祥の地であるイタリアではどのような音楽教育が行われているのか知りたくなった。

プロを育てる音楽院のカリキュラム

各音楽院で独自の歴史があるので、国で統一したカリキュラムは存在しないのだそうだ。専門楽器の比重が重く、語学や音楽に関する科目は必修で、日本の音楽大学と同様である。私が驚いたのは生徒の興味関心によって選択できる「追加」の科目である。

「マルチメディア」では、コンクールのビデオ審査で、マルチメディアを使いこなしてよりよいものを作成できるよう、見せ方なども含めて学習する。

「身体認知と表現」では、より美しく、楽曲に適切な身体表現をするにはどのように体を動かすのか等を学ぶ。

「イベントの計画」という科目もあり、文化事業や後援事業などが多いイタリアで、どのように企画運営を行っていけば良いのか学ぶ。

以上のような科目は、少なくとも私が音楽大学生であった時には存在していなかった科目である。

さらに驚いたのは、音楽院を卒業すると、その音楽院で働く資格が与えられるのだそうだ。

音楽院を修了した後、音楽の道で生計を立てていくことができるように、より実践的なカリキュラムを展開しているということがわかった。

音楽の道を志す学生にとっての理想は、在学中から多くのコンクールに挑戦して、受賞して活躍していくということである。しかし、このような理想の道はほんの一握りの人間にしか与えられておらず、残りは自分で切り開いていかねばならない。そうした時に、イタリアの音楽院のようにノウハウを学ぶことができるのは素晴らしいと感じた。

公立中学校での音楽教育

イタリアでは、専門的に音楽を学びたいければ「音楽院附属中学校」、音楽の授業が多く設定されている中学校の「音楽コース」へ進むこともできるそうだ。一般の中学校では、週2時間音楽の時間が設定されているが（日本より多い）、学習指導要領のような指針はなく、各教師に任せられているのだそうだ。日本と同様にグループワークを中心に授業を進めており、生徒同士で問題を解決させながら演奏を完成させていく過程を大事にしているとのことだった。これをコンペテツェと言い、イタリア（ヨーロッパ）では、インクルジオーネ（障害の有無等、多様な子どもたちが一緒に学ぶこと）とともに教育の要とされているそうだ。

終わりに

音楽の文化が根づいているイタリアで、音楽の道で活躍する人達から話を聞いたこと、実際に街でその歴史と文化を目にできたことは、今後の指導改善の一助となる大変意義あるものとなった。

支援して下さった企業経営研究所の皆様にご心より感謝いたします。ありがとうございました。



イタリアオペラ界の巨匠、ロッシーニの石像



イタリアには劇場が無数にあり、演奏家が活躍する



教会音楽は、バッハによって大成した